

関屋

渋谷栄一訳

第一章 空蝉の物語 逢坂関での再会の物語

「第一段 空蝉、夫と常陸国下向」

伊予介と言つた人は、故院が御崩御あそばして、その翌年に、常陸介になつて下行したので、あの帚木も一緒に連れられて行つたのであつた。須磨でのご生活も遙か遠くに聞いて、人知れずお惚び申し上げないではなかつたが、お便りを差し上げる手段さえなくて、筑波嶺を吹き越して来る風聞も、不確かな気がして、わずかの噂さえ聞かなくて、歳月が過ぎてしまつたのだつた。いつまでとは決まっていなかつたご退去であつたが、京に帰り住まわれることになつて、その翌年の秋に、常陸介は上京したのであつた。

「第二段 源氏、石山寺参詣」

逢坂の関に入る日、ちょうど、この殿が、石山寺にご願果たしに参詣なさつたのであつた。京から、あの紀伊守などといった子どもや、迎えに来た人々、この殿がこのように参詣なさる予定だ」と告げたので、道中、きつと混雑するだろう」と思つて、まだ暁のうちから急いだが、女車が多く、道いつぱいに練り歩いて来たので、日が高くなつてしまつた。

打出の浜にやつて来た時に、殿は、栗田山を既にお越えになつた」と言つて、御前駆の人々が、道も避けきれないほど大勢入り込んで来たので、関山で皆下りてかしまつて、あちらこちら杉の木の下に幾台もの車の轆を

下ろして、木蔭に座りかしまつてお通し申し上げる。車などは行列の一部は遅らせたり、先にやつたりしたが、それでもなお、一族が多く見える。車十台ほどから、袖口、衣装の色合いなども、こぼれ出て見えるのが、田舎風にならず品があつて、齋宮のご下向か何かの時の物見車が自然とお思ひ出しになられる。殿も、このように世に栄え出なされた珍しさに、数知れない御前駆の者たちが、皆目を留めた。

「第三段 逢坂の関での再会」

九月の晦日なので、紅葉の色とりどりに混じり、霜枯れの叢が趣深く見わたされるところに、関屋からさつと現れ出た何人もの旅姿の、色とりどりの狩襖に似つかわしい刺繍をし、絞り染めした姿も、興趣深く見える。お車は簾を下ろしなざつて、あの昔の小君、今、右衛門佐である者を召し寄せて、

「今日のお関迎えは、無視なさるまいな」

などとおつしやる、ご心中、まことにしみじみとお思ひ出しになることが数多いけれど、ありきたりの伝言では何の効もない。女も人知れず昔のことを忘れないので、あの頃を思い出して、しみじみと胸一杯になる。

「行く人と来る人の逢坂の関で、せきとめがたく流れるわたしの涙を、絶えず流れる関の清水と人は見るでしょう。お分かりいただけまい」と思うと、本当に効ない。

第二章 空蝉の物語 手紙を贈る

「第一段 昔の小君と紀伊守」

石山寺からお帰りになるお出迎えに右衛門佐が参上して、そのまま行き過ぎてしまつたお詫びなどを申し上げる。昔、童として、たいそう親しくかわいがつていらつしやつたので、五位の叙爵を得たまで、この殿のお蔭を蒙つたのだが、思いがけない世の騒動があつたころ、世間の噂を気にして、

常陸国に下行したのを、少し根に持つてここ数年はお思いになつていたが、顔色にもお出しにならず、昔のようにではないが、やはり親しい家人の中には数えていらつしやるのであつた。

紀伊守と言つた人も、今は河内守になつていたのであつた。その弟の右近将監を解任されてお供に下つた者を、格別にお引き立てになつたので、そのことを誰も皆思い知つて、どうしてわずかでも、世におもねる心を起したのだらう」などと、後悔するのであつた。

「第二段 空蟬へ手紙を贈る」

右衛門佐を召し寄せて、お便りがある。今ではお忘れになつてしまつた。うなことを、いつまでも変わらないお気持ちでいらつしやるなあ」と思つた。

「先日は、縁の深さを知らされましたが、そのようにお思いになりませんか。偶然に逢坂の関でお逢ひしたことに期待を寄せていましたが、それも効ありませんね、やはり潮海でない淡海だから、関守が、さも羨ましく、忌まふましく思われましたよ」

とある。

「長年の御無沙汰も、いまさら気恥ずかしいが、心の中ではいつも思つていて、まるで昨日のことのように思われる性分です。あだな振る舞いだと、ますます恨まれようか」

と言つて、お渡しになつたので、恐縮して持つて行つて、

「とにかく、お返事なさいませ。昔よりは少しお疎んじになつてるところがあるうと存じましたが、相変わらぬお気持ちの優しさといつたら、ひとしおありがたい。浮気事の取り持ちは、無用のことと思うが、とてもきつぱりとお断り申し上げられません。女の身としては、負けてお返事を差し上げなかつたところで、何の非難も受けませぬ」

などと言つ。今では、更にたいそう恥ずかしく、すべての事柄、面映ゆい気がするが、久しぶりの気がして、堪えることができなかったのであるうか、

「逢坂の関は、いつたいどのような関なのでしょう。こんなに深い嘆きを

起こさせ、人の仲を分けるのでしよう。夢のような心地がします」

と申し上げた。いとさも恨めしさも、忘られない人とお思い置かれてゐる女なので、時々、やはり、お便りなつて気持ちを揺るのであつた。

第三章 空蟬の物語 夫の死去後に出家

「第一段 夫常陸介死去」

こうしているうちに、常陸介は、年取つたためか、病気がちになつて、何かと心細い気がしたので、子どもたちに、もつぱらこの君のお事だけを遺言して、

「万事の事、ただこの母君のお心にだけ従つて、わたしの在世中と変わりなくお任せよ」

とばかり、明けても暮れても言つのであつた。

女君の、辛い運命の下に生まれて、この人にまで先立たれて、どのように落ちぶれて途方に暮れることになつていくのだらうか」と、思い嘆いていらつしやるのを見ると、命には限りがあるものだから、惜しんだとて止めるすべはない。何とかして、この方のために残して置く魂があつたらいいのだが。わが子どもの気心も分らないから

と、気掛かりで悲しいことだと、口にしたり思つたりしたが、思いどおりに行かないもので、亡くなつてしまつた。

「第二段 空蟬、出家す」

暫くの間は、あのようにご遺言なつたのだから」となどと、情けのあるように振る舞つていたが、うわべだけのことであつて、辛いことが多かつた。それもこれもみな世の道理なので、わが身一つの不幸として、嘆きながら毎日を暮らしている。ただ、この河内守だけは、昔から好色心があつて、少し優しげに振る舞うのであつた。

「しみじみと遺言なつてもおり、至らぬ者ですが、何なりと遠慮なさ

らずにおつしやってください」

などと機嫌をとって近づいて来て、実にあきれた下心が見えたので、
「辛い運命の身で、このように生き残って、終いには、とんでもない事まで
耳にすることよ」と、人知れず思い悟って、他人にはそれとは知らせずに、
尼になってしまったのであった。

仕えている女房たち、何とも言いようがないと、悲しみ嘆く。河内守も
たいそう辛く、

「わたしをお嫌いになつてのことに。まだ先の長いお年でいらつしやるうちに、
これから先、どのようにしてお過ごしになるのか」

などと、つまらぬおせつかいだなどと、申しているようである。